

# 20世紀初頭のトルキスタンにおける社会問題 —特に人生儀礼 (xatna, to'y, aza) について—

ジャスル・ヒクマトラエフ

## 目次

はじめに

1. 20世紀初頭のトルキスタンにおける人生儀礼について
2. 戯曲『割礼』
3. 戯曲『不幸な花婿』
4. ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」
5. 人生儀礼から教育改革へ

おわりに

参考資料

参考文献

## はじめに

ロシア軍がタシュケントを占領してから 50 年後に、トルキスタンのムスリム知識人ムッラー・アーリムは、その著作『トルキスタンの歴史』(1915 年)の中で、ロシア統治がもたらした利点について述べている。彼によれば、ロシア統治によって遊牧民による農民や隊商に対する略奪はやみ、「今やトルキスタンのステップには平安が行きわたり、文化的なロシア人の統治は、郵便、電信、鉄道によって中央アジアを知識と文化の世界に結びつけたのである。治安と安全が保証されているので、かつては大人数の隊商しか通過できなかったところが、いまや独行の旅人でも通行することができる」のである [バルトリド 2011: 206]。ロシアと結ばれたトルキスタンの経済は発展し、交通や通信の手段は大きく改善され、「以前のランプは電灯に代わった」と、彼はロシア統治下での経済・文化発展にも注目している。

しかし、その一方で彼は、「教育を受けなければ物質的な恩恵も奪われ」、やがてロシアの「教育を受けた商人や職人がムスリムに取って代わるのである」と、ムスリムの教育問題に読者の注意を喚起している。続けて、彼は次のように言う。

ムスリムの教育水準の低さは、彼らの中でもっとも学識のある教授や教師でさえ地理学の理解を持たず、自分の屋敷の外で起こっていることは知らないことから明らかであ

る。これは次の詩句を想起させる。「ほんのわずかな場所しかいらぬ虫けらには、天も地も同じこと」。宗教の知識なくして天上の王国に至ることはできないように、世俗の知識なくして地上の安寧を得ることはできない。われわれのもとにあるような宗教学校は、すべての文化的な民族のもとにある。しかし、そのほかに彼らのもとにはわれわれのもとにはないような世俗的な学校がある。たしかにムスリムの間でも教育への関心は増している。30 年前タシュケントにはロシア・ムスリム学校が 1 校あったのみで、生徒はほとんどいなかった。今ではロシア・現地民学校が 8 校あるものの、それでもなお不足しているのである [バルトリド 2011: 207-208]。

このように、ムッラー・アーリムはムスリムの教育問題を指摘しているが、それ以上の説明はない。それでは、同時代のトルキスタンのムスリム知識人は、この問題とどのように取り組んだのだろうか。

トルキスタンには古くから初等学校のマクタブとイスラム諸学を教える高等学院すなわちマドラサとからなる教育制度が存在していた。マクタブではアラビア文字の読み書きやイスラムの基本的教理が教えられ、ペルシア語で書かれた詩の暗誦も行われていた。しかし、19 世紀末になると、このマクタブは時代の要請に対応できなくなったのである [ジャスル・ヒクマトラエフ 2014: 378]。

これを認識したトルキスタンのムスリム知識人の一部は、トルキスタンのムスリムを教育し、民衆を啓蒙しようとした。彼らが開いた学校はウスーリ・ジャディード学校<sup>1</sup> (新方式学校) と名づけられ、教育の改革を旨とした彼らの運動は「ジャディード運動」と呼ばれるようになった。もっ

<sup>1</sup> ジャディードとはアラビア語で「新しい」という意味を表す。19 世紀末からムスリム知識人はトルキスタンで「新方式 (ウスーリ・ジャディード) 学校」を中心とした改革運動を始めた。

とも代表的なジャディード知識人は、マフムードホジャ・ベフブーディー (1875-1919)、ムナツヴァル・カリ (1878-1931)、アブドゥッラ・アウラーニー (1878-1934)、フィトラト (1886-1938)、ハージ・ムイーン (1883-1942)、アブドゥッラ・カーディリー (1894-1938)、チョルパン (1897-1938)、ハムザ・ハキムザーダ (1889-1929) などである。彼らは学校の開設だけではなく、教科書も出版した。新聞や雑誌も出版し、トルキスタンの現状を民衆に伝えようとした。しかし、民衆の大多数は読み書きができなかったため、彼らが民衆に与える影響には限界があった。そこで、ジャディード知識人は演劇が民衆を啓蒙する最も速い方法の一つだと考え、戯曲を書き始めた。最初の戯曲はベフブーディーの『父殺しPadarkush』(1913年)である。この戯曲はサマルカンドをはじめ、トルキスタンの他の地域でも上演され始めた。やがて、トルキスタンでは様々な劇団が生まれた。ジャディード知識人は戯曲を通じて社会問題を民衆に紹介しはじめたのである。このような知識人の戯曲や論説の中には人生儀礼の問題が多く見られる。

ジャディード運動についてはこれまで様々な研究が行われてきた。ウズベキスタンでは M.B.サリホフ [Salihov 1935]、N.カリモフ [Karimov 2011]、B.カシモフ [Qosimov 1990; 2005; 2006; 2009]、Sh.リザエフ [Rizaev 1997]、G.ヒドヤトフ [Xidoyatov 1992] などの研究者がジャディード運動について重要な研究成果を発表している。海外でもジャディード運動についての研究を行っている研究者は少なくない。日本の小松久男 [Komatsu Hisao 2005; 2011; 2012; 2014]、島田志津夫 [Shimada Shizuo 2002]、アメリカのアディーブ・ハーリド、ドイツのインゲボルク・バルダウフなどがベフブーディーやジャディード運動について様々な研究を行っている。

以下、代表的なモノグラフ、論説などの内容を紹介し、整理しておきたい。

A.ハーリドのモノグラフ [Adeeb Khalid 1990] は、ジャディード運動について英語で書かれた代表的な著作であり、19世紀末～20世紀初頭のトルキスタンにおける教育事情、改革運動の展開を詳しく分析し、また、ジャディードとイスラーム保

守派の間の摩擦や植民地社会の成立についても検討している。

インゲボルク・バルダウフ [Baldauf 2001] は、中央アジアにおけるジャディード運動と当時の知識人ベフブーディー、フィトラトなどの活動について詳しく検討している。また、ベフブーディーの雑誌『アーイナ』を分析し、ベフブーディーの教育構想について述べている。さらに、チョルパン、カーディリー、フィトラトなどのジャディード知識人の民衆啓蒙への試みを詳しく分析している。

ソ連時代、ジャディード運動に関する研究を自由に行うことはできなかった。この時代に発表された研究の多くは、ソビエト・イデオロギーに相応しい形で書かれていたが、以下の研究はジャディード運動についてなお参照に値する。K.E.ベンドリコフの著作 [Bendrikov 1960] は、伝統的な寺子屋式の学校マクタブをはじめ、20世紀初めまでのトルキスタンにおける教育事情について詳しく論じている。

M.B.サリホフ [Salihov 1935] は、ウズベク戯曲について詳しく考察している。当時の代表的な戯曲を分析し、知識人がなにを伝えようとしたのかについて書いている。また、それぞれの戯曲を批判的に検討し、その弱点や欠点などについて述べている。

ペレストロイカ以降、とくにウズベキスタンの独立以来、ジャディード運動に関する関心がたかまり、数多くの研究がなされるようになった。例えば、Sh.リザエフ [Rizaev 1997] は、トルキスタンにおける演劇の出現と成立、そしてとりわけジャディード戯曲を考察している。トルキスタンの戯曲に対するヨーロッパ戯曲の影響についても述べている。さらに、トルキスタン最初の劇団であるトゥラン劇団についても詳しく検討している。また、ジャディード戯曲が直面した障壁についても述べている。

以上のように、ジャディード運動やジャディード戯曲について様々な研究が行われているが、ジャディード知識人が取り組んだ人生儀礼の問題に関する研究はまだ十分になされていない。そこで本稿では、ジャディード戯曲や知識人の論説を手がかりに、20世紀初頭のトルキスタンにおいて大

きな社会問題とされていた「人生儀礼」について考察したい。具体的には結婚式 (To'y)、葬式 (Aza)、割礼 (Xatna) を取り上げ、当時トルキスタンで活動していた代表的な知識人が「人生儀礼」についてどのように考えていたのかを考察したい。

まず、当時の結婚式、葬式、割礼の実態を検討する。その際、同時代の雑誌や新聞に掲載されていた知識人の論説を分析する。具体的には次の三点を中心に分析する：①ハージ・ムイーンの戯曲『割礼 To'y』(1914)、②アブドゥッラ・カーディリーの戯曲『不幸な花婿 Baxtsiz kuyov』(1915)、③雑誌『アーイナ』に掲載されたマフムードホジャ・ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望 A'molimiz yoinki murodimiz」(1913)。上記の戯曲や論説を分析し、「人生儀礼」の問題点とその解決策について検討する。そして最後に、「人生儀礼」はなぜ社会問題としてとらえられたのかを述べ、「人生儀礼」に関する知識人の見解をまとめることにしたい。

## 1. 20世紀初頭のトルキスタンにおける人生儀礼について

トルキスタンでは古くから人生儀礼を盛大にあげるという習慣が存在していた。ベフブーディーは、雑誌『アーイナ』に掲載されている「我々の希望もしくは願望」という記事に「ほとんどの民衆の希望は働いてお金を稼ぐことであり、息子や娘の結婚式をあげることである。それはどんな結婚式だろうか？それは自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式である」と書いているように、人々は皆、立派な結婚式をあげるために昼も夜も働いていた。昔から、子供がいる家族は、結婚式を盛大にあげなければ、親戚や近所の人々の間で尊敬を失うことになっていた。そのため、一生苦労し、稼いだお金のすべてを人生儀礼に使っていた。それでは、人生儀礼、つまり「割礼、結婚式、葬式」を見てみよう。

ロシア革命から間もない1919年3月22日に新聞『労働者の声 Mehnatkashlar tovushi』にハージ・ムイーンの「人生儀礼について To'y va aza marosimi haqinda」という論説が掲載された。ここでハージ・ムイーンは当時の結婚式、割礼、葬式について詳しく説明している [Hoji Muin 2005:

89-93]。この論説で、ハージ・ムイーンは人生儀礼を盛大にあげることを批判し、次のように述べている。

我々トルキスタンの民衆は無学であるため、様々な儀礼のせいで困難な状況に陥り、精神・経済的に大きな損害を受けている民族である。我々を巻き込んでいる慣習のなかで最も有害なのは割礼と結婚式、葬式である [Hoji Muin 2005: 89]。

ここでハージ・ムイーンは、人生儀礼のありさまを強く批判し、最も有害な慣習だと主張している。同じことは、すでに革命前からベフブーディーらも主張していた。当時は貧しい職人であっても人々に尊敬されるために、借金してでも盛大な人生儀礼をあげていたのである。これについてハージ・ムイーンは次のように述べている。

我々の民衆は「財産と命を失っても、尊敬を失ってはならない」と考え、割礼、結婚式、もしくは葬式を盛大に行うために、手元にあるすべての物を大なしにし、借金もする。借金を返せないと、自分の園庭や家を売って、借金を返すのである。このようにして、一方で、財産をなくし、路頭に迷う。他方で、尊敬も失い、あの世に行ってしまう [Hoji Muin 2005: 89-90]。

このように、当時の人々は将来の生活を考えずに、借金までして盛大な人生儀礼をあげていたのである。こうした状況をジャディード知識人は鋭く批判する。彼らは、民衆に幸せをもたらすには、人生儀礼のあげ方を改革しなければならないと考えていた。ハージ・ムイーンはこの論説で、割礼、結婚式、葬式はどのようなもので、どのように改革すべきかについて検討している。これをもとに、上記の人生儀礼はどのようなものだったのかを見てみよう。

### 割礼

割礼はイスラーム教のスナット<sup>2</sup> (sunnat) の

<sup>2</sup> 預言者ムハンマドの教えや習慣に由来するイスラーム

一つである。ふつう男子が生まれてから9歳になるまでの間に行われる。11-12歳の時に行う人もいるが、非常に少ない。トルキスタンではこの儀礼は1日から5-6日ほどの時間をかけて行われる [Hoji Muin 2005: 90]。割礼を受ける男児のために新しい敷布団や掛け布団、たくさんの服などが用意される。家族によっては子馬を買って与える親もいた。割礼式には宴会 (bazm)、コプカリ (ko'pkari)<sup>3</sup> といった行事も含まれていた。コプカリは1-3日間行われ、主催者は優勝者に賞品を用意しなければならなかった。

### 結婚式

19世紀末の結婚式は五つの部分からなっていた。それは、「仮の婚約 non shikanon」、「婚約 fotiha」、「披露宴 nikoh」、「花嫁の挨拶 ro'yi binon」と「花婿へのご馳走 domod talabon」である。結婚式をあげる人は客人の一部に伝統的な長衣 (to'n) をプレゼントしなければならなかった。また、客人は帰るときにパンやお菓子を持って帰っていた。また、女性の客が帰るときにはプロフ (伝統的な料理 palov) も配られていた。

### 葬式

ハージ・ムイーンによると、当時は葬式に集まった人々に「生地 yirtish」を配る慣行もあったという。また人が亡くなってからその家族は三日、七日、二十日、四十日、一年目に近所や親戚の人々に伝統的な料理「プロフ」をふるまわなければならなかった。

上記の儀礼のいずれも主催者には大きな経済的負担がかかる儀礼であった。ここで人生儀礼の実態について説明したが、次にハージ・ムイーンの説く改革方法について考察しよう。

この論説で、ハージ・ムイーンは、トルキスタンでは人生儀礼のために資金を浪費していることを批判し、このような習慣はトルキスタン以外のムスリムにはないと主張している。例えば、アラビア、エジプト、イスタンブール、カフカス、クリ

ミアやイランなどの地域では、割礼のために盛大な儀礼あるいは宴会は挙行しないことを述べている。彼らは預言者ムハンマドのスナットである割礼だけで済ませていることを指摘し、トルキスタンのムスリムも割礼を彼らのように簡素な方法で行うべきと述べている。結婚式と葬式に関しても、派手すぎることを、無駄遣いが多いことを、贈物が多いことを強く批判し、できるだけ小規模に行うように呼びかけている。

ここまで、当時の人生儀礼はどのようなものだったのかについて検討したが、次にジャディード知識人の戯曲や論説を分析してみよう。

## 2. 戯曲『割礼』

サマルカンド出身のハージ・ムイーンは12歳の時に両親をなくし、モスクのイマームを務めていた祖父の下で育った。1901年に旧方式学校 (マクタブ) の教師として働き始め、1903年にサマルカンドで新方式学校を開校した [Hoji Muin 2005: 5]。

ハージ・ムイーンはヌスラトッラ・クドラトッラと共に1914年に戯曲『割礼』を書いている [Hoji Muin 2005: 8]。『割礼』は1914年末にトゥラン劇団によって上演され、成功をおさめた [Rizaev 1997: 65]。『割礼』が1915年6月1-3日にフジャンド (Xo'jand) でも上演されたことを証明する戯曲ポスターがアブドゥッラ・アウラーニーの記念館に所在している [Rizaev 1997: 66]。

『割礼』は、息子の割礼のために大きな祝宴をあげ、その結果、破産してしまう資産家 (バイ)<sup>4</sup> を描いた作品である。資産家は盛大な割礼をあげないと人々に笑われ、面目を失うと考え、盛大な儀礼をあげる。その結果、すべての資産を割礼に使ってしまい、破産するという筋書きの悲劇作品である。この戯曲は4幕から成り立っており、第1幕の内容は割礼の相談である。この相談の場では資産家に助言する人物が二つに分かれており、一つは、割礼を小規模に行うように資産家に勧める人々、もう一つはできるだけ盛大に行うように勧める人々である。

小規模で行うように勧めるのは、ハージ・ババ (Hoji bobo) と銀行員 (Mirzo) である。盛大に行

法の慣行。

<sup>3</sup> 馬に乗って子羊を奪い取るゲームであり、割礼を行う人はコプカリを開催しなければならなかった。

<sup>4</sup> ウズベク語では「金持ち」や「資産家」を意味する。

うように勧めるのは、地区長アクサカル<sup>5</sup> (oqsoqol)、ババ・ヒタブ (Bobo Xitob)、エシュナザル (Eshnazar)、ヒディルバイ (Xidirboy) などである。盛大に行うように呼びかける人々は皆、「割札を盛大にやらないと皆に笑われる」、「割札にカーディー、ムフティー、ムダッリス、ウラマーなどを招待し、皆に一着ずつ『伝統的な高級な長衣To'n』をあげないといけない」、「大きなコプカリをやらないとほかの地区の人々に笑われる」、「稚児遊びのない割札は良くない」などのアドバイスをする。「稚児遊びjuvonbozlik」というのは少年(juvon)の踊りを楽しみながらの飲み会のことである [Begmatova 2006: 11]。

この戯曲でハージ・ババは一回しか発言しないが、それはとても興味深く、意味のある発言である。彼はメッカへの巡礼に行く途中にイスタンブールで26日間滞在し、元スルタンの子息の割札に参加したこと、またその割札に30~40人ぐらいの客が参加したこと、その割札ではお茶一杯しか出されていないこと、またイスタンブールでは盛大な割札、祝宴、コプカリなどは行われないうことについて述べられているからである。

ハージ・ムイーンは、巡礼を行ったことで尊敬されるべきハージ・ババの発言を通じて、トルキスタン以外の地域のムスリムは割札を小規模で行っていることを民衆に伝えようとしていることがわかる。

また、相談の場に途中から参加した銀行員は資産家に次のようなアドバイスをする。それは次のように要約できる。

人生儀礼のためにお金を無駄遣いするのはトルキスタンの民衆だけで、他の民族はこのような無駄使いはしません。だから、彼らは次第に発展し、我々は無駄遣いのせいで破産し

てしまいます。あなたも苦労して稼いだお金を無駄使いしないでください。割札に使おうとしている1万5千スムのうち5千スムを使って息子さんを教育すれば、あなたの息子さんは知識人になり、残りの1万スムはあなたに残ります [Rizaev 1997: 161]。

このように、銀行員は資産家に無駄遣いをせず、小さな割札を行うように勧めている。ハージ・ババも銀行員も比較的近代化が進んでいるイスタンブールとほかの民族の例を示しているが、これは彼らが他のイスラーム諸国に行って自分の目で見えてきたものを民衆に伝えたかったからである。

しかし、資産家はこのような忠告を無視し、すべての資産を使って盛大な割札をあげる。その結果、資産の全てを失って破産してしまうのである。

『割札』の最後に銀行員の言葉がある。その言葉は『割札』に込めたハージ・ムイーンの考えを明瞭に表現しているので、以下にその言葉を引用することにしよう。

我々トルキスタンのムスリムがお酒を飲み、稚児遊びをし、さらに無駄遣いをするのは我々には知識がないからです。ほかの民族は皆、稼いだお金を学問と教育、宗教のために使い、だんだん発展していますが、我々は知識がないために我々の庭や家を売って、そのお金で人生儀礼を行い、最後には破産しています。ムスリム諸兄、もし我々が今から人生儀礼の無駄遣いをやめないならば、最後にはすべての物を失ってしまうことでしょう

[Rizaev 1997: 170-171]。

この発言からも分かるように、ハージ・ムイーンは、派手な人生儀礼の原因は無学と無知だと主張し、人生儀礼を小規模で行うように呼びかけている。民衆は人生儀礼を問題と感じていなかったが、ハージ・ムイーンやベフブーディーなどの知識人は人生儀礼を社会問題と見なしたのである。それは彼らが、同じイスラーム地域のイスタンブール、メッカ、メディナなどを訪ね、相対的に近代化が進んでいる地域の社会を自分の目で見えてきたからである。

<sup>5</sup> アクサカルは地区長のこと。[トルキスタン統治] 規程案により、[タシュケント] 市内各地区（このような地区や街区の数を定めることは総督に委ねられていたが、実際には以前からあったタシュケントの四区分が維持された）のミンバシは、「アクサカル」に代えられ、しかもそれは「キルギズ人の郷長[に相当する] 権力」を行使するはずであった（アクサカルはペルシア語では rish-i safid 「白ひげ」の意で、トルキスタンには古くからあったが、実際は決まった法的な権限はなく、その年齢と富、以前の貢献によって尊敬をかちえた人物になった）。バルトリド『トルキスタン文化史2』、157-158頁。

また、ハージ・ムイーンはこの戯曲を通じて二つの大きな社会問題を取り上げている。その一つが、民衆の経済的な困難であるとすれば、もう一つは、悪習の蔓延である。ダムッラー<sup>6</sup>の発言を通じて祝宴 (bazm) で行われる「稚児遊び」や「飲み会 mayxo'rlik」がイスラームに反することを民衆に伝えようとしている。

### 3. 戯曲『不幸な花婿』

タシュケント出身のアブドゥッラ・カーディリーの『自伝 Tarjimai hol』によると、彼は貧しい家庭に生まれ、9-10歳になってからマクタブに入学した。マクタブでおおよそ2-3年教育を受け、家族の経済的な困難のため、12歳になると資産家の使用人として働き始めた。その資産家は商人であり、ロシア語の読み書きができる者を必要としていたのでカーディリーをロシア語の学校に送った。カーディリーはタタール人が出版していた新聞を読み始め、はじめて新聞というものを知ったという。また、この『自伝』では「1913年に出版されたベフブーディーの『父殺し』の影響を受けて『不幸な花婿』(1915)を書いた」と述べている。

『不幸な花婿』も悲劇作品である。この戯曲では、一人の孤児が叔父の圧力で自分の家を担保にし、盛大な結婚式の費用を借金して結婚する。しかし、結婚式の後に借金を返せなかったため家を失い、あげくのはてに夫婦は自殺してしまうという筋書きになっている。

この戯曲では花婿の叔父がエツリクバシ<sup>7</sup>と一緒に花嫁の家を訪ね、結婚式の相談をする。この相談の場には、花婿であるサリフの側から、叔父のアブドゥルラヒムとサリフが住んでいるマハッラ<sup>8</sup>のエツリクバシが参加し、花嫁の側からは、花嫁の父ファイジバイと花嫁であるラヒマが住ん

でいる地区のダムッラーが参加する。エツリクバシは結婚式を出来るだけ小さくし、シャリーア(イスラーム法)に従って結婚式を行うように呼びかける。また、花婿からあまり資金を貰わないように頼むが、花嫁の父は盛大な結婚式をしないと娘をあげないと答える。

ここで、エツリクバシとダムッラーの相談の場の会話を引用してみよう。

エツリクバシ: シャリーアによると、花婿は花嫁に「贈物 mahr」を用意し、一杯の水で結婚を済ませる。預言者ムハンマドは「花婿からたくさんのお金、絨毯、布団、ネックレスなどをもらいなさい、花婿が借金してもいいから」と言ったのだろうか? 現在、我々トルキスタンのムスリム以外のムスリム、つまり、メッカ、メディナ、イスタンブルなどのムスリムは上記のようにシャリーアに基づいて結婚式を行うのである。花婿からお金をもらうのは非イスラーム的な行為だと考えられている。我々のように浪費はしない、(ダムッラーに向かって)ダムッラー様、あなたもイスラーム教の学者のはず。神と預言者ムハンマドの教えは上記のようなものではないのか? ファイジバイが訊ねていることはシャリーアに反しているのではないか?

ダムッラー: それぞれの地域でムスリムの習慣は違うのである。我々も自分の地域の習慣に従わなければいけない。

エツリクバシ: あらゆる地域のムスリムの習慣は同じである。いずれの地域のムスリムもみなシャリーアに基づいて結婚式を行うのである。我々トルキスタンのムスリムは、無学と無知のために、シャリーアに反する方法で行うのである [Rizaev 1997: 183]。

この発言から分かるように、エツリクバシは、

<sup>6</sup> イスラーム教の学者の尊称。

<sup>7</sup> 五十人長 (エツリクバシ) は、[トルキスタン統治] 規程案により、50戸の代表として選ばれ、カーディー (裁判官) も選び、区域ごとに税を割り当てていた。バルトリド『トルキスタン文化史 2』、157-158頁。

<sup>8</sup> 中央アジアの都市や農村部の街区あるいは地区社会。語源はアラビア語やペルシア語で〈場所〉〈地区〉を意味する mahalla。マハッラの住民は、モスクやマクタブ (初等学校)、パン焼き釜などの共有、結婚式や葬式などの人生儀礼への相互参加、日常的な相互扶助や共同作業 (ハッシャル) の実行などによって共同体的な社会を営んできた。『中央ユーラシアを知る事典』484頁。

宗教的に見て結婚式での無駄遣いはよくないこと、イスタンブル、メッカ、メディナでも結婚式は小規模に行われること、花婿から色々な贈り物を貰わないことなどを言い続けるが、ダムッラーはイスラーム法をよく知らないため、小規模の結婚式には賛成しない。さらに、花嫁の父も賛成しないのである。結局、エッリクバシの反対にもかかわらず、花婿の叔父アブドゥルラヒムは賛成し、婚約をする。

その結果、花婿は自分の家を担保にし、お金を借りて結婚するが、返済の期日にお金を返せなくなる。花婿は、借金を返せず、家を失って生きるよりは死んだ方がましだと考え、自殺しようとする。しかし、夫の死を我慢できないと考えたラヒマは先に自殺してしまう。それを見たサリフも自殺する。このようにして、夫婦がともに自殺してしまうのである。

この戯曲の最後にエッリクバシが観客に向かって発言する言葉がある。この語りは、カーディリーの考えを明瞭に表現しているので、以下にその言葉を引用しておこう。

皆さんもこのような浪費をしています。皆さんは、無駄遣いの結果を自分の目でご覧になったでしょう。皆さん、シャリーアに従い、目を開いてください。無駄遣いをしないで、そのお金で息子さんを教育してください。あるいは、慈善団体に寄付してください。息子を教育するのは義務で、良いことでもあります。結婚式の無駄遣いはシャリーアに反する行為です。結婚式を盛大に行うことの問題の一つは、多くの若者は結婚式の資金がないために 30~40 歳まで結婚できず、お酒を飲んだり、稚児遊びをしたり、女遊びをしたりしています。彼らは我々の名を汚し、全イスラーム世界にとって恥ずかしい行為をしています。これは誰のせいでしょうか？もちろん、娘を持つ父親たちです。彼らはシャリーアを従わずに盛大な結婚式を求めるからです [Rizaev 1997: 193]。

この発言でも、結婚式を小規模で行うように呼びかけている。また、カーディリーは、節約した

お金で子供を教育するように呼びかけている。また、結婚式の資金を稼げない若者が稚児遊びや女遊びに走ることも指摘しているが、それは、当時の大きな社会問題となっていたからである。また、カーディリーは結婚式の経済的な負担の重さを強調している。

この戯曲でも相対的に近代化が進んでいたイスタンブル、メッカ、メディナなどとの比較の観点が現れている。また、宗教的な観点からの批判も述べられている。上記の『割礼』と『不幸な花婿』からわかるように、イスラーム保守派は人生儀礼の無駄遣いには反対していなかった。保守派はジャディード運動の担い手の障壁となり、これと対立していた。その理由の一つは、当時、マクタブとマドラサの教師を担当していたのはイスラーム保守派を形成するムダッリスやムッラーだったが、新方式学校が開校されると、彼らが務めるマクタブやマドラサに通う生徒の数は減り始めたからである。これについて小松久男は、次のように述べている。

新方式学校によって既得権を失いかねない保守派のムスリム知識人はこれに強い非難をあげせ、新方式の支持者には「イスラームからの逸脱」や「背教者」という表現すら用いられた [小松久男 2014: 41]。

イスラーム保守派が反発したもう一つの原因は、ジャディード知識人の創作、上演した戯曲である。イスラーム保守派は演劇を異教徒がもたらした「ハラーム」<sup>9</sup>とみなして攻撃した。こうした理由でジャディード知識人とイスラーム保守派の対立が生じたのである。ジャディード知識人は保守派に対抗するために、自分たちの戯曲や論説では、宗教的な観点からの議論も展開した。

ジャディード知識人は、イスラーム保守派に対抗するために新しいイスラームの解釈を打ち出しているようにみえる。たとえば、上記に引用したダムッラーとエッリクバシの会話をみると、保守派を代表するダムッラーは「それぞれの地域でムスリムの習慣は違うのである。我々も自分の地域の習慣に従わなければいけない」と語る。これに

<sup>9</sup> 「ハラーム」はイスラーム法の定める禁止行為をいう。

対して、ジャディード知識人を体現するエツリクバシは、「いずれの地域のムスリムもみなシャリーアに従って結婚式を行う」のであり、「トルキスタンのムスリムは、無学と無知のために、シャリーアに反する方法で行うのである」と述べて、地域的な慣行を認めない立場をとる。いわば、保守派の唱えるローカルなイスラームに対して普遍的なイスラームの正当性を主張し、保守派を論駁するのである。このような論法はジャディード知識人に共通して見られる。彼らの論説にイスラームの聖典コーランやハディース（預言者ムハンマドの言行録）からの引用がしばしば現れるのはそのためである。

#### 4. ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」

ベフブーディーは、1913年11月30日（6号）と同年12月7日付（7号）の『アーイナ』に「我々の希望もしくは願望 A'molimiz yoyinki murodimiz」という論説を書いている。6号の論説では、人生儀礼の問題点を指摘し、強く批判している。7号では人生儀礼に使う資金の一部を教育の発展や人材育成に使うべきだと述べている。

それでは、6号と7号の論説を順に見てみよう。

6号では、トルキスタンの「ほとんどの民衆の希望は働いてお金を稼ぐことであり、息子や娘の結婚式をあげることである。それはどんな結婚式だろうか？それは自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式である」と述べ、民衆は結婚式を自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式を上げようとする旨を指摘している。

この論説では、当時、昼も夜も長時間働き、食べ物も着るものも我慢する貧しい職人の希望も盛大な結婚式をあげることに述べている。

また、ベフブーディーは結婚式に途方もない資金がかかることを指摘し、「一人の職人の結婚式に1000スム、中流の家族の結婚式には2000スムか3000スムかかる。準資産家の結婚式には4000-5000スムが必要である」と述べている。

また、ベフブーディーは「毎日裁判所でどれほどの家屋、部屋、園庭が売られていることか。毎日どれほどの約束手形と引受拒否がなされ、どれほどの店や会社が破産していることか。これは何

のためだろう。結婚式、葬式、服喪、コブカリ、宴会のためである」と述べ、人生儀礼の無駄遣いを強く批判している。

この論説の最後にベフブーディーは、まとめの言葉を書いている。それは次の通りである。

あるマハッラに読み書きができる人は20人のうち一人もいない。イスラームの教義を原典とともに知っている人は言うまでもない。将来[旧来の]カーディーがいなくなっても、現代の要請に対応できるカーディーになれる人は全トルキスタンの千万人の中に一人としていない。いない、いないのはなぜか。皆の衆！我々は愚か者なのか、それともまともなのか。もちろん... [Behbudiy 1913: 132]

この最後の発言を見るとベフブーディーの本当の悩みが見えてくる。この論説から分かるように、ベフブーディーは、トルキスタンのムスリムの希望と願望がもっぱら「人生儀礼」であることに憤りを感じており、それが大きな社会問題であることを民衆に伝えようとしている。人々は自分を犠牲にしても「人生儀礼」のために借金をしていたが、児童の教育のことを考えてはいなかった。ロシア帝国がトルキスタンを征服してから、近代化も進み始め、世俗的な教育が必要不可欠なものになっていた。民衆はこうした現状を把握できていなかったが、ベフブーディーのようなジャディード知識人は現状を理解していた。そのため、このような論説や戯曲を書いて民衆に伝えようとしたのである。ベフブーディーはこの論説の続きとして、第7号の論説を書いている。

第7号の論説では、結婚式を小規模にし、節約したお金で児童をイスラーム式あるいはロシア式に教育するように呼びかけている。また、青年を海外に送り、宗教的・世俗的、そして現代的な人材を育成すべきと主張している。ベフブーディーには「トルキスタン自治」<sup>10</sup>を実現する夢があっ

<sup>10</sup> Turkiston Muxtoriyati [ウズベク語] - ロシア二月革命は、植民地トルキスタンにおいてもムスリムの政治・社会運動の活性化を促し、自治の実現が中心的な課題となった。1917年11月にフェルガナ地方のコーカンドで開かれた第4回臨時トルキスタン・ムスリム大会は、民主的なロシア連邦共和国の形成を前提としたトルキスタンの

た。そのためには、世俗的な知識を具え、ロシア語もできる知識人が必要不可欠と考えていた。また、ベフブーディーは、ムスリムとして読み書きができなければならないと指摘し、宗教に関する知識も教えるように呼びかけている。

また、ベフブーディーは、「我々のトルキスタンには教師が少ないので、結婚式や儀礼に要する資金を使ってカフカス、クリミア、オレンブルグならびにカザンに教育方法を習うために生徒を送らなければならない」と述べ、なによりも教師を育成すべきことを主張している。

なぜなら、当時知識人がいたとしても、教師となれる者の数はきわめて少なかったからである。当時の教師のほとんどが旧方式のマクタブとマドラサを卒業した人であり、イスラーム教の基礎は知っていても、世俗的な教育は受けていなかったのである。

また、ベフブーディーは教育の発展のための「団体」を作ることに触れている。ここでベフブーディーは次のように述べている。

生徒のために寄宿学校「パンシオン」を開かねばならない。この寄宿学校は近代的かつ民族的・宗教的な精神を備えなければならない。この寄宿学校を開校し、国立の学校に進む生徒を育てるために「教育普及」あるいは「慈善団体」、「児童教育団体」、もしくは他の名前をもつ、要するに団体が必要である [Behbudiy 1913: 155]。

このような団体はなぜ必要であったのだろうか。ジャディード知識人が開校していた新方式学校の運営、教科書の作成、生徒を海外へ送り出すために資金が必要だったからである。

ここで、20世紀初頭のトルキスタンにも新しく登場した慈善団体、団体活動についてふれておく必要がある。第一次世界大戦期のロシアにおける慈善団体の増加について、長縄宣博は次のように述べている。

ロシア帝国で慈善協会が急速に増加し始めたのは、1890年代初めのことである。この当時、欧露のムスリム団体は、ロシア人の協会の支部として活動することが多かったが、1905年革命後には、ゼムストヴォや市会の支援も受けながら、独自の組織として発展した [長縄宣博 2012: 73]。

このように、ロシア帝国では、慈善協会は1890年代から出現し、増加し始めたが、1905年の革命後、市会の様々な支援を受ける組織として発展した。1905年革命後にはムスリムの政治・社会運動も活発化した。ヴォルガ・ウラル地域のムスリムの間には、1905年革命を機にタタール語の新聞と雑誌が多数出現し、急速に普及した [長縄宣博 2012: 74]。トルキスタンの知識人もこのような新聞や雑誌を読んでいた。タタール人の影響を受けたジャディード知識人は、トルキスタンでも慈善団体が必要だと理解し始めた。彼らも1905年の革命後に次々と新聞・雑誌を刊行し、トルキスタンのムスリムを啓蒙しようとした。このような出版物の主なテーマは、社会の問題点、教育への呼びかけ、青少年のしつけなどだったが、その中には慈善団体の結成に関する論説もあった。『アーイナ』におけるベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」はその一つの例だと考えられる。

また、第7号で、ベフブーディーはトルキスタンのムスリムのために努力する人材、つまり宗教的・世俗的、そして現代的な人材を育成しなければいけないと主張している。すなわち、

このような団体は民衆から資金を集め、民衆の児童を教育し、民族の未来のために必要なカーディーつまり裁判官、法学者つまり弁護士、エンジニアつまり工学者、先生つまり近代的な教師、民族に奉仕する人つまりドゥーマの議員、伝統的な産業を改良し、復興する人つまり技術者、商館や銀行で我々を支援する人つまり商学教育を受けた「実業家」、都市のドゥーマやこれからトルキスタンに開かれるはずのゼムストヴォ（地方自治機関）の運営に我々から選ばれ、我々のために、祖国ロシアのために、宗教すなわちイスラーム教の

---

自治を決議した。しかし、1918年2月19日、トルキスタン自治政府はソビエト政権とアルメニア人民族組織の軍事力により打倒され、コーカンドは流血と破壊の巷と化した。『中央ユーラシアを知る事典』389-390頁。

ために、貧しい人々のために、そして民衆のために働く人々を育てなければならない [Behbudiy 1913: 155]。

以上二つの論説からベフブーディーの人生儀礼論をまとめてみよう。ベフブーディーが悩んでいたのは、民衆の考え方が浅かったことである。人々が日々の生活、とりわけ盛大な人生儀礼にしか関心を示さず、教育の普及と時代の要請に応えられる人材の育成に無関心であることは、ベフブーディーにとって放置することはできなかつた。彼にはトルキスタンのムスリムを一つの民族として統一し、自治を実現する夢があったからである。それには教育の普及が必要であった。彼からすれば、盛大な人生儀礼に消費される資金は、教育にこそ振りむけられるべきなのであった。ベフブーディーをはじめとするジャディード知識人が人生儀礼を解決すべき社会問題として議論した一つの理由は、ここに認めることができるだろう。

また、ベフブーディーは、「我々の希望もしくは願望」の6号において人生儀礼に途方もない資金がかかることを指摘している。見方を変えれば、これは彼がロシアによる征服後のトルキスタンの経済的な進展を把握していたからである。バルトリドは、当時のトルキスタン・ムスリム社会の経済的な進展について次のように書いている。

フェルガナ地方ではバイすなわち資産家階層が、現地の農民とロシア人の棉花買付人との間に立つようになった。タシュケントの商人たちの間には、これまでにない資本家が出現した。現地のある事情通によれば、タシュケントではかつて「1万から1万5000ルーブル持っていれば資産家と見なされたのが、今では（論文は1903年に書かれた）サルト人の間で、名だたる資産家と見なされるには、少なくとも約50万ルーブルを持っていなければならない」のであった [バルトリド 2011: 115]。

このようにロシアによる征服後、トルキスタンでは綿花の栽培が拡大し、綿花取引が盛んになったことから、ムスリムの間でも資産家が増大し、資産家階層の手元には資本が蓄積されるようにな

った。しかし、ベフブーディーらが指摘したように、こうした資産家は教育の改革に貢献しようとしなかつた。ジャディード知識人の教育改革の議論の背景にはこのような現実を打破する目的があったと考えられる。

## 5. 人生儀礼から教育改革へ

以上見てきたように、ジャディード知識人はいずれも当時の人生儀礼のあり方を批判し、小規模で行うように呼びかけている。ハージ・ムーインの『割礼』に描かれているように、当時の資産家は一度の割礼で破産してしまつた。また、カーディリーの『不幸な花婿』の若い夫婦も、結婚式のために借りた金を返せず、家を失って、自殺してしまうのだった。

これらの戯曲は誇張して書かれているように見えるかもしれないが、ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」を分析すれば、これらの戯曲のストーリーは、日常的に起こっていたことがわかる。これについてベフブーディーは次のように述べている。

ある職人が20年間働いて稼いだ金は3日間の結婚式でなくなる。[中略] 盛大な結婚式をあげて妻をめとつた一部の貧乏人の状況には泣かされる。3日間の結婚式の「服喪」は家族によっては10年、さらに一生続くときもある。しばしば結婚式は家を失い、家が荒れる原因となる [Behbudiy 1913: 132]。

この発言からもわかるように、当時の人生儀礼は大きな社会問題であった。このことは同時代の他の論説からもうかがうことができる。たとえば、ラフマトウツラ・アフマド・オグリなる人物は、雑誌『トルキスタンの声 Sado-i Turkiston』の第2号に「人生儀礼に関する質問」という論説を投稿し、人生儀礼についていくつか質問を書いている。この論説では、ある人物はかつて資産家の一人であったが、3-4回人生儀礼を挙げてから貧乏になり、いまや6人の子供の結婚式や割礼をあげようとしても資金がなく、困っていることを述べ、人生儀礼を小規模で行うことは可能かどうか、について質問しているのである。著者は次のよう

に述べている。

現在、結婚式と割礼式を済ませていない子供は6人いる。まだ割礼していない上の息子は11-12歳ぐらいであり、次の息子たちもこれに近い年齢である。現在、割礼式をあげるための資金を持っていない。割礼式を小規模で行うように決心し、近くのモスクのイマームに相談したが、彼は私を叱って、「あなたは我々の習慣をなくしたいのか？」と言った。私は、「イマームよ、私の手元に資金はありません。お金をいったいどこから手に入れて割礼式をあげますか？」と答えた。この会話の最中にマハッラのエリックバシも入って来た。エリックバシにも声をかけてみたが、エリックバシは、「ダムッラーならばよく知っている」と言って、答えをダムッラーに任せた。ダムッラーは、「現金は持っていないくとも、3-4カ所に土地を持っているだろう。その一つを売れば、手元に大金が入ってくる。そのお金で割礼式をあげれば、大勢の貧乏人や孤児を食べさせることができる。もしこのご馳走をしないのであれば、大きな罪になる。また、皆に悪い目で見られ、孤立することになるだろう。あなたの他の子供たちの食べ物はこちらがくたされよう」と答えた。私はこの言葉に答えをせずに、ダムッラーのところを去って、バザールに向かった。[中略]。この件について雑誌に書いて、聞くことにした。私は割礼式をあげなければ大きな罪を冒すことになるのでしょうか？いまは、この土地のおかげで生活をしているのです。子供たちの教育費もこの土地で働いて稼いでいます。もし、この土地を売れば、もっと貧乏になってしまいます。もし、売らなければ、ダムッラーに「大きな罪である」と言われます。私はこの「大きな罪である」という言葉が怖いのです。皆に悪い目で見られるのは怖くない。早速の回答を待っています [Rahmatulla 1914: 3-4]。

この質問に関して、雑誌『トルキスタンの声』の第6号に、「人生儀礼に関する回答」という記事が掲載された。この論説には、イスラーム法に通

じたコーカンド、サマルカンドとブハラのマドラサの教師（ムダッリス）たちの回答が書かれている。たとえば、コーカンドのマドラサの教師は次のように答えている。

もし、ある人が土地を持っており、その土地で働いてお金を稼いでいるとすれば、その土地を売ることによって貧乏になる恐れがあるなら、その土地を売って人生儀礼を挙げるのは罪である [Idora 1914: 1]。

サマルカンドとブハラのマドラサの教師も同じく、土地を売ってまでして盛大な人生儀礼を行うことを批判している。この二つの論説からはジャディード知識人の機関誌ともいえる『トルキスタンの声』は、人生儀礼のはらむ問題を広く訴え、中には彼らの主張に賛同するムダッリスもいたことがわかる。

上記にとりあげた論説や戯曲でジャディード知識人は人生儀礼を批判的に見ているが、彼らは人生儀礼そのものを否定したわけではない。その盛大さ、無駄遣いを批判したのである。人生儀礼は、民族の文化あるいは伝統であり、いずれの民族も上記のような人生儀礼を行うはずである。問題はその規模である。ジャディード知識人は人生儀礼を行わないのではなく、小規模に行うように呼びかけている。ベフブーディーは、論説「我々の希望もしくは願望」で次のように述べている。

もし結婚式や儀礼に以前のように金を無駄使いしなければ、その金をどうすればよいか？ その答えは次の通りである。結婚式や儀礼をあげてもよい。しかし、現在のように無駄使いしてはいけない。可能な限り小規模にしよう [Behbudiy 1913: 154]。

このように、ジャディード知識人は、人生儀礼を批判的に見ても、民族的な慣行を捨てるのではなく、その規模を小さくするように呼びかけているのである。

その上で、ベフブーディーは人生儀礼を小規模にして、そこで節約した資金を人材育成のために使うべきと述べている。なぜなら、ベフブーディー

一にはトルキスタンの自治を実現する夢があったからである。先に述べたように、ベフブーディーにとって、トルキスタンの自治の実現は極めて重要なことであり、それにはムスリム青年を教育することが不可欠であった。彼は民衆に自由と発展をもたらすのは教育を受けた青年だと考えていた。そのために、ジャディード知識人は戯曲を書いて上演したり、新方式学校を開校して教育改革運動を指導したり、新聞や雑誌を刊行したりして、トルキスタンの民衆を啓蒙しようとしたのである。ベフブーディーが「我々の希望もしくは願望」で呼びかけたように、ジャディード知識人は自分たちの資金で新方式学校を開校し、運営した。これについて、『トルキスタンの声』の4号に掲載された「トルキスタンの新方式学校 Turkiston maktablari」という論説では次のように述べられている。

前回の論説で取り上げた発声方式という名前の学校は5年前に人々の信頼を失って、衰退したが、次に述べる親愛なる資産家たちが相談し、よりきちんとした学校を開校する構想に至った。このためにまず、ミール・ドーダ・ハージ氏は学校に最も相応しいいくつかの部屋からなる自分の客間を提供し、さらに、毎月定期的に学校のために12スム〔ルーブル〕を寄付すると約束した。この話を聞いて、他の人々も毎月提供できるものを約束し、1908年3月1日にアブドゥサーミ・カーリを教師に任命し、学校を実際に開校した。自分たちの中から一人を会計係に任命し、約束した寄付を毎月この会計係に渡していた。会計係は教師の給料と学校の経費をここから使い、残ったものを貯金していた。この方法で学校は6ヶ月間ほど生徒を教育した後、公開試験を実施し、民衆に紹介した〔Maktab do'sti 1914: 2〕。

この論説が示すとおり、ジャディード知識人はベフブーディーが主張したように、自分で学校を開校し、資金を集め、民衆を教育したのである。

## おわりに

本稿で取り上げた戯曲と論説からわかるように、当時、経済的な面でも文化の面でも「人生儀礼」は社会の大きな問題とされ、ジャディード知識人はそれを解決しようと努力した。それはなぜだろうか。その背景には、ジャディード知識人の意図を示すいくつかの理由があった。第1に、盛大な人生儀礼はムスリムの資産家にとっても、また貧者にとっても大きな負担をかけるものであり、ときには一家の零落や破滅さえ招きかねなかったからである。第2に、ジャディード知識人はトルキスタンのムスリムを無学で無知から啓蒙しようとしたからである。彼らは相対的に近代化が進んでいた地域との比較から、トルキスタンの発展のために世俗的な教育を具えた人材が必要不可欠だと考えていたと言える。そのために、人生儀礼のための浪費のような社会の様々な問題を解決しようとしたのである。第3に、ジャディード知識人は近代の諸条件に適合した人材を育成するために教育改革を実践したが、当時のムスリム社会のなかでそれに必要な資本を見いだすことは容易ではなかった。しかし、盛大な人生儀礼に消費される資金が教育改革に用いられたならば、状況は大きく変わるとジャディード知識人は考えていたのである。ジャディード知識人の人生儀礼に関する議論は、このような戦略に基づいていたと考えられる。

ジャディード運動はおよそ30年間続き、この間に彼らは社会を様々な面から発展させようと努力した。彼らの活動によって、民衆はイスラーム教の基礎だけではなく、世俗的な教育にも関心を持つようになった。また、人生儀礼はある程度小規模に行われるようになったが、完全に成功することはできなかった。現代のウズベキスタンを見ても、割礼式は小規模に行われるようになっているが、結婚式では現在もなお無駄使いが多く、盛大に行われている。葬式も七日、二十日、四十日、一年目の儀式は今も行われている。何百年も続いてきている慣行を変えることは非常に困難なことであり、ジャディード知識人の改革構想に30年という時間は不十分だったのである。

## 参考資料

## 雑誌『アーイナ』

## 「我々の希望もしくは願望」

1913年11月30日刊行 6号、130-132頁

Jasur Khikmatullaev 訳

周知のとおり、世界の人々はみな願望と希望を持って生きている。昼も夜も苦勞するのも未来のためである。人は皆自分の未来が良くなるように努力し、将来自分の夢や願望が叶うように休むことなく力の限り働く。人は日々苦勞しながらも、皆自分の将来と未来のためになにか良い希望を持ち、そして自分の目標を定める。そしてその願望と目標を達成するために努力し、毎日負っている苦勞をその目標を達成するために厭わず、さらに頑張る。時にはまるでその目標が達成されたと安の願望と目標を追及しない者はない。この願望と目標を学術用語では希望と言う。

さて、我々の希望に注目しよう。ほとんどの民衆の希望は働いてお金を稼ぐことであり、息子や娘の結婚式をあげることである。それはどんな結婚式だろうか？それは自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式である。

貧しい職人の希望は結婚式である。自分は楽しい生活をせず、昼も夜もおよそ18時間あるいは20時間も働いて過ごす職人がいる。食べ物も着る物も我慢する。10、20年間苦勞しながら働いて、結婚式をあげるために息子がさずかるように神に祈る。これこそが貧しい職人の希望である。

20年間働いて稼いだお金は3日間の結婚式でなくなり、「Ahmad Porina 哀れなアフマド」のように家屋と園庭も売ってしまう。結婚式の費用のために金貸しから逃げる。盛大な結婚式をあげて妻をめとった一部の貧乏人の状況には泣かされる。3日間の結婚式の「喪」は家族によっては10年、さらに一生続くときもある。しばしば結婚式は家を失い、家が荒れる原因となる。

一人の職人の結婚式では1000スム、中流の家族の結婚式では2000スムか3000スムかかる。準資産家の結婚式には4000-5000スムが必要である。このお金の75%は飲食に消える。このお金はもと

もと誰のお金だったのか。銀行・会社・高利貸のものだった。当然なことながら彼らにお金を返さなければいけない。いったいどうやって返すのか。園庭や家屋、家具を売ってお金を返さなければいけない。哀れな新婚夫婦の掛け布団や服まで売って、高利貸に借金を返す。こうして準資産家も赤字になる。生前にはならなくとも、死んでからなる。妻は路頭に迷う。おお、これはいったい何なのか。正直言って、これは正気の沙汰ではない。何たることか。お金を借りてまで人々に結婚式のプロフをご馳走するのは狂気の沙汰ではないか。この病は不治である。

ある人が一度結婚式をあげ、その後、彼の家族から誰かが亡くなって葬式をすれば一巻の終わり。その家族が職人であれば、この世では再起もできず亡くなってしまう。さて、貧者が亡くなると、その親戚は体面を保とうと孤児の財産を人々に手ずから記念の贈物やピラフとしてふるまう。気の毒な孤児のパンを金持ちの人が持って帰るのである。「孤児の財産に手をつけるな。食べても飲んでももったいないことをしてはならぬ」というハディースはどこに行ったのか。ムスリムたちよ、このコーランの章句とイスラーム法の規定をいったい誰が実行するのか。そして、これを誰が人々に伝えるのか。毎日ムスリムの財産がバザールで宗教儀礼のために全ての財産が売られている。

また、毎日裁判所でどれほどの家屋や部屋、園庭が売られていることか。毎日どれほどの約束手形と引受拒否がなされ、どれほどの店や会社が破産していることか。これは何のためだろう。結婚式、葬式、喪、コプカリ、宴会のためである。

あるマハツラに読み書きができる人は20人のうち一人もいない。イスラームの教義を原典とともに知っている人は言うまでもない。将来カーディー（裁判官）がいなくなっても、現代の要請に対応できるカーディーになれる人は全トルキスタンの千万人の中に一人としていない。いない、いないのはなぜか。皆の衆！我々は愚か者なのか、それともまともなのか。もちろん...

雑誌『アーイナ』

「我々の希望もしくは願望」

1913年12月7日刊行 7号、154-156頁

Jasur Khikmatullaev 訳

第6号の続き

我々は結婚式、葬式と儀礼のために我々のけなしの財産を失い、儀礼が我々を貧しくし、借金を背負うことについて前号で書いた。今度は読者に質問する権利がある。これは良いことである。人は皆いずれの集団も希望と目標を持っているに違いない。我々は結婚式と儀礼のことを想って満足していた。我々の結婚式や儀礼を誇りに思っていた。結婚式や儀礼にかかるお金を貯えるため、もしくは手に入れるために働くのだった。

もし結婚式や儀礼に以前のように金を無駄使いしなければ、その金をどうすればよいか？その答えは次の通りである。結婚式や儀礼をあげてもよい。しかし、現在のように無駄使いしてはいけない。可能な限り小規模にしよう。余った金を使って児童をイスラーム式とロシア式にしっかりと教育しよう。結婚式や儀礼にかかる金を古いマドラサ、廟、モスクそして学校の修理に使おう。結婚式や儀礼にかかる金を使って生徒を国の学校に通わせよう。またこの金で学生をメッカ、メディナ、カイロ、イスタンブルならびにロシアの大学や専門学校に送り、宗教的・世俗的、そして現代的な人材を育成するように努力しようではないか。

我々のトルキスタンには教師が少ないので、結婚式や儀礼に要する金を使ってカフカス、クリミア、オレンブルグならびにカザンに教育方法を習うために生徒を送らなければいけない。

国の学校に入学するにはロシア語を知らなければならぬ。また、試験を受けなければならぬ。そしてこの試験を受けるために各生徒に約2年間ロシア語を教えなければいけない。この2年間で各生徒に600スムが必要である。資産家の親は結婚式や儀礼のために金を惜しまないように、子供の教育にも金を惜しまないだろう。

生徒のために寄宿学校「パンシオン」を開かねばならぬ。この寄宿学校は近代的かつ民族的・宗教的な精神を備えなければならぬ。この寄宿

学校を開校し、国立の学校に進む生徒を育てるために「教育普及」、あるいは「慈善団体」、あるいは「児童教育団体」、もしくは他の名前をもつ、要するに団体が必要である。

このような団体は民衆から資金を集め、民衆の児童を教育し、民族の未来のために必要なカーディーンつまり裁判官、法学者つまり弁護士、エンジニアつまり工学者、先生つまり近代的な教師、民族に奉仕する人つまりドゥーマの議員、伝統的な産業を改良し、復興する人つまり技術者、商館や銀行で我々を支援する人つまり商学教育を受けた「実業家」、都市のドゥーマやこれからトルキスタンに開かれるはずのゼムストヴォ(地方自治機関)の運営に我々から選ばれ、我々のために、祖国ロシアのために、宗教すなわちイスラーム教のために、貧しい人々のために、そして民衆のために働く人々を育てなければならない。

今の老人はさておき、中年の人々もやがて亡くなってしまふ。時代は日々新たになり、新しい知識と新しい考え方をもち、現代の科学を備えた人々を要求する。今日から各都市から毎年10-20人ほどの学生が国立の学校に入学すれば、15年後には各都市に4-5人は現代的な人材が育つ。そして官職や現代的な職場、商工の企業に就職し、我々に利益をもたらす。

これから来る時代は今とは異なる。今二人のムスリムが対立すれば、ユダヤ人と外国人の弁護士の所に行く。頭痛があれば外国人の医者の方に行く。どうして我々は自分で勉強し、現代人にならないのか？これから我々にとって結婚式、葬式、コプカリの代わりに、上記に述べたことが我々にとって希望・理想・願望・望み・目的になるように。そうでなければ、我々は日ごとに衰え、弱くなっていくだろう。なんということだろう！

参考文献

日本語文献

- 小松久男ほか（編） 2005『中央ユーラシアを知る辞典』平凡社。  
 小松久男 2014『激動の中のイスラーム 中央アジア近現代史』山川出版社。  
 長縄宣博「総力戦のなかのムスリム社会と公共圏」塩川伸明・小松久男・沼野充義（編）2012『ユーラシア世界4 公共圏と親密圏』東京大学出版会。  
 バルトリド・V.V. 2011『トルキスタン文化史2』小松久男監訳、平凡社。

ウズベク語文献

- Alimova, N.I., 2004, *Chor Rossiyasining Turkistonda milliy madaniyat sohasida olib borgan siyosati*, Toshkent.  
 Baldauf, I., 2001, *XX asr o'zbek adabiyotiga chizgilar*. Toshkent.  
 Begmatova, E., va boshq., 2006, *O'zbek tilining izohli lug'ati (ikkinchi jild)*, Toshkent.  
 Hoji Muin, 2005, *Tanlangan asarlar*, Toshkent.  
 Karimov, N., 2011, *Mahmudkho'ja Behbudiy*, Toshkent.  
 Mahmudkhoja Behbudiy, 1913, "A'molimiz yoinki murodimiz", *Oyna*, No. 6-7, Samarqand.  
 Maktab do'sti., 1914, "Turkiston maktablari", *Sado-i Turkiston*, No. 4, Toshkent.  
 Niyozov, G., Ahmedov, Q., Tojiboev, Q., 2010, *Sharq allomalari va ma'rifatparvar adiblarining barkamol avlod tarbiyasiga oid ma'naviy-axloqiy qarashlari*, Toshkent.  
 Qosimov, B., 1990, "Jadidchilik", [Yoshlik], No.103, 71-78b, Toshkent.  
 Qosimov, B., 2005, *Ishoqxon to'ra Ibrat*, Toshkent.  
 Qosimov, B., 2006, *Abdulla Avloniy, 2-jild*, Toshkent.  
 Qosimov, B., 2009, *Abdulla Avloniy, 1-jild*, Toshkent.  
 Rahmatulla, A.O., 1914, "To'y xususida savol", *Sado-i Turkiston*, No.2, Toshkent.  
 Rizaev, Sh., 1997, *Jadid dramasi*, Toshkent.  
 Salihov, M.B., 1935, *O'zbek teatr tarixi uchin materiallar*, Tashkent.  
 Sharipov, R., 2002, *Turkiston Jadidchilik harakati tarixidan*, Toshkent.  
 Xidoyatov, G.A., 1992, *Mening jonajon tarixim*, Toshkent.  
 [Idora] 1914, "To'y masalasina javob", *Sado-i Turkiston*, No.6, Toshkent.

ロシア語文献

- Bartol'd, V.V., 1963, *Akademik V.V. Bartol'd Sochineniya*, tom 2-1, Moskva.  
 Bendrikov, K.E., 1960, *Ocherki po istorii narodnogo obrazovaniya v Turkestane*, Moskva.  
 Rakhmanov, M., 1981, *Uzbekskiy teatr s drevneyshikh vremen do 1917 goda*, Tashkent.

英語文献

- Adeeb Khalid, 1990, *The Politics of Muslim Cultural Reform*, University of California Press.  
 Shimada Shizuo, 2002, *An Index of Ayina*, Central Asian Research Series, No.5, Tokyo.